

藍澤南城「三餘集自序」譯注稿

村山 敬三

まえがき

「三餘集自序」は藍澤南城（一七九二—一八六〇）の詩文集『三餘集』の卷十四に載せられている。南城は越後國刈羽村南條（現新潟縣柏崎市南條）に學塾三餘堂を開いた儒者である。『三餘集』は南城の詩文がほぼ年代順に記されたもので全十七卷、自筆稿本であつて、現在新潟縣立圖書館に所藏されている。そして、『三餘集』から三百六十三編の作品を選んで『南城三餘集』（上下・内題は「三餘集抄」）が刊行されているが、「三餘集自序」はその序として書かれたものであり、刊本『南城三餘集』においては「三餘集抄題言」（以下「題言」と略稱）と題されている。文末に記されているように南城六十五歳での執筆である。詩文集の序であるから當然詩文に關係した内容ではあるが、南城はここで自身の經學にも觸れながら「折衷」について説明している。したがつて、これは南城がその晩年において力をこめて書いたはずの文章であり、南城の學問を考える上で非常に重要な一編であると言える。

《凡例》

一、本譯注の底本は新潟縣立圖書館藏の『三餘集』（全十七卷。自筆稿本）であり、刊本『南城三餘集』（上下）も

参照した。その文字の異同は【考異】でまとめて示した。

一、原本では返り點、送り假名が付されているので、本文はそれも原本のとおりに示した。書き下し文は極力原本の訓みに従ったが、現代の訓み方に合わないものもあり、筆者の判断で訓み方を變えた箇所もある。その箇所には書き下し文に傍線を付した。なお、コト、ドモ、シテを記す記號はカナ表記に改めた。字體については、原本では舊字體と新字體が入り交じっているが、本稿では舊字體に統一して示した。

一、譯注は【原文】【書き下し文】【注】【現代語譯】【考異】からなり、重要な事柄については【補説】を文末に付した。

一、本文は讀解の便を考えて、五段落に分けた。

—

【原文】

今代之文運凡^レ三變。初^レ自^二室町^一至^二大阪之世^一。戰國縱橫。天下無^レ文章^一。慶元止戈之後。學者始^レ有^レ作。而其風或唐或宋。各從^レ所^レ好。而未^レ脫^二和習^一。故^二其氣萎靡不振^一。是爲^二初變^一矣。既^レ而文運日^レ隆。鉅作家矯^二時弊^一以^二古雅^一。其結撰。標^二掠^一古人之成語^一。屬綴^レ以^レ作。其格其調。宛然^二古矣^一。是爲^二再變^一矣。然^レ適^二人之適^一。而不^レ適^二己之適^一。譬^二之剪彩之花^一。姿色逼似。而非^二天生之物^一也。及^二其風漸頹^一也。陳陳相因。躑躑相襲。賀^レ生則蓬萊龜鶴。吊^レ死則北邙薤露。千篇如^レ一。殊^レ可^レ厭。於^レ是豪傑之士。矯^レ之以^二清新之風^一。其結撰務去^二陳言腐語^一。杼軸由^レ我。織^レ自成^レ文。巧^レ亦吾巧。拙^レ亦吾拙。決^レ不^レ倣^二人之響^一。是爲^二三變^一矣。然^レ摘藻固

非^レ下^ハ俳^ハ借^ハ戲^ハ語^ハ自^ツ吐^ッ。其^ニ方^言之^ニ類^上。則^レ必^ツ須^ニ才^學達^識。而^レ後^能成^レ之^ヲ。非^ニ才^學達^識。而^レ任^セ意^ニ造^ル語^ヲ。憤^憤乎^{トシテ}。如^シ癡^人語^レ夢^ヲ。又^多雜^ニ梗^棘奇^澁之^ニ語^ヲ。以^テ掩^フ其^拙。猶^シ之^腐陳[、]焉[、]在^ニ其^爲清^新哉[。]

【書き下し文】

今代の文運凡そ三變、初め室町より大阪の世に至るまで、戰國縱横、天下に文章無し。慶元止戈の後、學者始めて作有り。而して其の風或いは唐或いは宋、各と好む所に従ふ。而して未だ和習を脱せず。故に其の氣萎靡して振はず。是を初變と爲す。既にして文運日に隆んに、鉅作家時弊を矯むるに古雅を以てす。其の結撰、古人の成語を標掠し、屬綴して以て作す。其の格其の調べ、宛然として古なり。是を再變と爲す。然れども人の適を適とし、己の適を適とせず、之を剪彩の花に譬ふれば、姿色逼似するも、天生の物に非ざるなり。其の風漸く類るるに及びてや、陳陳として相困り、蹊蹊として相襲ふ。生を賀すれば則ち蓬萊龜鶴、死を吊せば則ち北邙薤露、千篇一のごとし。殊に厭ふべし。是に於て豪傑の士、之を矯むるに清新の風を以てす。其の結撰務めて陳言腐語を去り、杼軸我に由り、織りて自ら文を成す。巧も亦吾が巧、拙も亦吾が拙、決して人の顰に倣はず。是を三變と爲す。然れども摘藻固より俳借戲語自ら其の方言を吐くの類に非ざれば、則ち必ず才學達識を須つて、而る後に能く之を成す。才學達識に非ずして意に任せて語を造せば、憤憤乎として癡人の夢を語るがごとく、又多く梗棘奇澁の語を雜へて、以て其の拙を掩ふ。猶しく之れ腐陳、焉んぞ其の清新たるに在らんや。

【注】

○今代之文運凡三變——「今代」は今の時代。古代からの歴史における今代。ここでの今代は、漢文學の文化が發

生した時代、具體的には以下の文で述べられている室町以降の時代のこと。「三變」の述べ方は文章三變説に基づいた述べ方。なお、廣瀬淡窓の『儒林評』に「二百年來ノ儒風。大略三變セリ。」の文がある。

○慶元止戈——「慶元」は慶長と元和の年號。江戸の初期のこと。「止戈」はほこをとどめる意から、戦争をやめること。

○鉅作家——「鉅」は大の意。以下に述べられた「古雅」の内容は荻生徂徠を中心とした格調説の運動を指している。したがって、「鉅作家」とは荻生徂徠やその門人の服部南郭などを念頭に置いていると考えられる。

○適人之適、而不適己之適——『莊子』駢拇篇に「適人之適、而不自適其適者也。」（人の適を適として、自ら其の適を適とせざる者なり。）とある。

○陳陳相因、蹺蹺相襲——「陳陳相因」はもと穀物などが積み重なる、また古いものが積み重なること。そこから、古いものを受け継ぐだけで新味に乏しいことを言う。「蹺蹺」は『漢語大詞典』に「奔忙貌」とあるが、『集韻』に「蹺」は「行兒」（行の兒）とある。したがって「蹺蹺相襲」も同じことが繰り返されていくさまを言う。

○蓬萊龜鶴——「蓬萊」は仙人が住んでいたという想像上の山。「龜鶴」は鶴と亀で、長壽の喩えとして用いられる。常套語の例として述べたもの。

○北邙薤露——「北邙」は洛陽の東北にあった邙山のこと。多くの王侯公卿がここに葬られた。「薤露」は薤露歌、漢代の葬式の歌。これも常套語の例として述べたもの。

○豪傑之士——「之を矯むるに清新の風を以てす」と以下に述べていることから考えれば、古文辭學派の格調説を批判して清新を旨とする性靈説を主張した山本北山を念頭に置いたものと思われる。

○結撰——文章を作ること。『楚辭』「招魂」に「結撰至思、蘭芳假些」（至思を結撰し、蘭芳假^{いた}）とある。

○杼軸——『詩經』小雅「大東」の詩に「小東大東 杼軸其空」(小東大東 杼軸其れ空し)とあり、杼も軸も機織りの具で、機織りのこと。轉じて文章を作ることを言う。『文選』陸機の「文賦」に「雖杼軸於予懷、怵侘人之我先。」(予が懷に杼軸すと雖も、侘人の我に先んぜんことを怵る。)とある。

○倣人之擘——「擘に倣ふ」は越の美女西施の故事に基づく語。よく考えずにむやみにまねをする喩えとして使われる。『莊子』に天運篇にその記事があり、「書言故事大全、評論類」に「彊學人、日效擘」(彊ひて人に學ぶを、擘に效ふと曰ふ)とあるという(大漢和辭典)。

○吐其方言——「俳偕戲語」が和語によつて歌われること。漢語が中國の言語であることから見ると、和語は「方言」にあたると考へての表現であらう。

○癡人語夢——『大漢和辭典』「癡人說夢」の項に「愚人が妄誕の言を出すこと。又、説くところが要領を得ない喩。」とある。簡野道明の『故事成語大辭典』では「癡人ノ前ニ夢ヲ説ク」の項に伊藤東涯の秉燭譚や黃山谷題跋などの用例をあげている。

○猶之——「均之」と同じ。『論語』堯曰篇に「猶之與人也、出納之吝、謂之有司。」(猶しく之れ人に與ふるなり。出納の吝かなる、之を有司と謂ふ。)とある。

【現代語譯】

現代において漢文學の進歩衰退は大體三回の變化が見られる。最初は室町時代から豊臣秀吉の天下統一の時代までのことで、戰國時代では群雄が縦横に争いを繰り返して、天下に文章と言へるものはなかった。江戸の初期、戦が終わった後に、學問をする者に始めて作品が生まれた。そして彼らの作風は唐風のものがあり宋風のものがあり、

各人が自分の好みに従つて作つた。そしてまだ和習を脱することができないでいた。だからその意氣込みは衰えて振わなかつた。この時期が初變である。まもなく漢文學は日ごとに盛んとなり、大作家は時代の弊害を古雅によつて直そうとした。その文章の作り方は、古人の成語をとつてきて、それをつなぎ合わせて作つたものである。その作品の品格や調べは、いにしえのままであつた。これが再變である。しかし、(そういう作品は)人の好みにはあつても、自分の氣持ちにびつたりしたものではない。このことを造花の花に喩えると、姿や色は本物に似てはいるが、自然のものではないということである。その風潮が次第に爛熟すると、新味に乏しく似たり寄つたりの作品が多く生まれた。生を祝うときには「蓬萊龜鶴」、死を弔うときには「北邙薤露」といった具合に、どの作品も同じ表現になつてしまつたのである。全く避けるべきことである。そこで豪傑の士は、清新の風によつてその風を改めた。その文章の作り方は努めて陳腐な言葉を使わず、自分自身の表現を考え、獨自な表現で文章を書いた。巧みな表現は自分の巧みさであり、拙い表現も自分の拙さであつて、全く人の物真似ではない。これが三變である。しかし詞章を作ることは本来、俳偕や戯れ歌が普段話している言葉で表現される類のものとは違い、必ず才學達識を備えてからできることである。才學達識でないのに意に任せて言葉を作れば、愚かな人が夢の話をするようにあいまいではつきりせず、さらにわかりにくい語を多く使うことで自分の拙さを隠すことになる。(そのような作品は)どれも陳腐でどうしてそれが清新であることにならうか。

【原文】

夫矯弊者。必有_レ所_レ激_{スル}而偏。故六朝文章之靡。韓柳以_レ理勝。宋元文章之弊。李王以_レ辭勝之類。皆偏而已矣。而乃今選_ニ集_シ其矯枉過直者。謂_フ作文之規矩不_レ過_レ之者。亦猶_下韓非_カ刑名矯柔懦之政_一。墨翟_カ儉素矯奢侈之俗_一。而各以爲_テ道盡_ト于此_一者也。故古雅也。清新也。一廢一起。有_レ時乎王。有_レ時乎輿儻。暫可_三以矯_ニ當時之弊_一。非_ニ作文規矩之常_一也。於是調停家兼_ニ用古與_レ新_一。而執_ニ其中_一。無_レ偏無_レ黨。渾_ニ化_一于形迹之外_一。以爲_レ得_ニ折衷之法_一者有_レ之。然是_レ所謂執_レ中無_レ權。與_ニ偏見_一何擇焉。吾_カ所謂折衷者、大異_ニ于此_一矣。今聊以_ニ經學_一喻_レ之。吾_テ於_ニ經說_一勤_ニ折衷_一四十餘年。論_ニ孟詩書易禮_一。各有_ニ私定_一說_一。愚得_レ副焉。凡若干卷。其所_レ取。以_ニ聖經_一證_ニ聖經_一。旁_ラ及_ニ于他_一賢傳_一者。上也。取_ニ漢唐之訓詁_一者。次也。取_ニ宋明之窮理_一者。又其次也。及_ニ于清人之考證_一者。亦又其次也。如_レ此而有_ニ不_レ安者_一。則有_レ時乎取_下雜家小說_一所_レ論。能_レ協_ニ其義_一者_上補_レ之。亦芻蕘之餘詢。是其所_レ取、不_レ擇_ニ古今高下_一。不_レ論_ニ賢愚貴賤_一。唯其當_レ之爲_レ尚矣。折衷之志如_レ此。

【書き下し文】

夫れ弊を矯むる者は、必ず激する所有りて偏す。故に六朝文章の靡、韓柳理を以て勝ち、宋元文章の弊、李王辭を以て勝つの類、皆偏するのみ。而して乃今其の枉を矯め直に過ぐる者を選集し、作文の規矩之に過ぎずと謂ふ者は、

亦猶ほ韓非が刑名、柔儒の政を矯め、墨翟が儉素、奢侈の俗を矯めて、各と以て道此に盡くと爲す者のごときなり。故に古雅や、清新や、一廢一起し、時有りてか王、時有りてか輿儻、暫く以て當時の弊を矯むべくも、作文規矩の常に非ざるなり。是に於いて調停家古と新とを兼用して、其の中を執り、偏無く黨無く、形迹の外に渾化して、以て折衷の法を得たりと爲す者之有り。然れども是れ謂ふ所の中を執りて權無し。偏見と何ぞ擇ばん。吾が謂ふ所の折衷なる者は、大いに此に異なれり。今聊か經學を以て之を喩へん。吾經說に於て、折衷を勤むること四十餘年なり。論孟詩書易禮、各と私定の說有り。愚得副す、凡そ若干の卷。其の取る所、聖經を以て聖經を證し、旁ら他の賢傳に及ぶ者は、上なり。漢唐の訓話を取る者は、次なり。宋明の窮理を取る者は、又其の次なり。清人の考證に及ぶ者は、亦又其の次なり。此のごとくにして安んぜざる者有れば、則ち時有りてか雜家小説の論ずる所、能く其の義に協ふ者を取りて之を補ふ。亦芻蕘の餘詢なり。是れ其の取る所、古今高下を擇ばず、賢愚貴賤を論ぜず、唯だ其の之に當たるを尚しと爲す。折衷の志此のごとし。

【注】

○激——『漢語大詞典』に「偏激」とある。限度を超えてしまふこと。『荀子』不苟篇に「察而不激」（察すれども激ならず）とある。

○韓柳以理勝——中唐の韓愈と柳宗元は、六朝時代以來の形式美を求める駢文に對して散文を再評價しようとする古文運動を提唱した。

○李王以辭勝——明の嘉靖年間、古文辭派と呼ばれる李攀龍・王世貞らは、宋學を排斥し、文は西漢以前、詩は唐の天寶以前を理想とした修辭的文學を主張した。

○乃今——二字で「いま」。『莊子』「逍遙游」に「而後乃今將圖南。」（而る後乃今將に南を圖らんとす。）とある。『題言』では「乃今」となっており、「乃ち今」と讀んでいるようである。

○調停家——ここでは「古雅」と「清新」とをそのまま受け継ぎながら、うまく兩者のバランスをとって自己の文學作品を生み出そうと苦心する人のこと。補注①参照。

○論孟詩書易禮、各有私定說——南城の著述の中に、『論語私說』六卷六冊、『孟子古注考』七卷（草稿本一・四卷缺、淨書本一・二・四卷缺）、『三百篇原意』九卷九冊、『古文尚書解』十四卷十四冊、『周易索隱』六卷六冊、『禮記講錄』八卷八冊がある。すべて新潟縣立圖書館藏。

○執中無權——『孟子』盡心上に「執中爲近之、執中無權、猶執一也（中を執るは之に近しと爲すも、中を執り權すること無ければ、猶ほ一を執るがごときなり）」とある。「權」はもともとハカリのこと、ここでは權宜の意。その時々に応じて物事を適切に判斷すること。

○芻蕘之餘詢——「芻蕘」は本來は草刈りと木こりの意。自分の日常生活のこと。「餘詢」の「詢」は調べる、考查する。平素の讀書によつて得た自らの見解のこと。

○唯其當之爲尚矣——『荀子』不苟篇に「唯其當之爲貴。」の句が見える。『左傳』昭公十六年「發命之不衷、（命を發して衷らざる、）とあり、杜預注は「衷、當也」である。補説②参照。

【現代語譯】

そもそも弊害を改めようとする者は、必ず勢いのあまり一點を強調してしまい、偏りが出てしまうものである。だから六朝時代の文章の華やかさに對して韓愈や柳宗元が道理によつて勝ろうとし、宋元の頃の文章の弊害に對して

李攀龍や王世貞が古文辭によつて勝ろうとした類は、どれも偏りがあるのを免れない。そして今（この江戸の世において）、弊害を直したもののそれが行き過ぎた作品を選び集めて、文章を書く規範はこのようなものだと言う者もまた、韓非子が刑名の論によつて軟弱な政治を改め、墨子が儉素の説によつて贅澤な風俗を正すなどして道理がこれで盡くされたと主張する者と同じことである。だから古雅にしても、清新にしても、一つが廢れると一つが興るといふように、互いにある時には主となり、ある時には従となつたりしながら、しばらくの間は當時の弊害を改めることができたにしても、作品を書く際の不變の規範ではない。そこで調停家は古と新とを兼用して、その真ん中をとり、偏りもなく黨派もなく、昔のやり方から離れて新しく一體のものとする事で折衷の法を得たと考えた。しかし、これは孟子の「真ん中をとつているだけで基準になるものがない」といふようなもので、偏見と何ら變わらない。わたしの言う折衷とは、大いにこれとは違ふ。今少し經學に喩えて説明しよう。私は經説において、四十餘年にわたつて折衷の學に勤めてきた。『論語』『孟子』『詩經』『書經』『易經』『禮記』、それぞれに私定の説がある。いくつかの卷には、自分の得た見解を付け加えてある。諸説で取つたところは、聖經によつて聖經を證明しつつ、その一方で他の傳によつても考へているものは、上である。漢唐の訓詁を取つたところは、次である。宋明の窮理を取つたところは、又その次である。清人の考證を入れて考へているところは、さらに又その次である。このようにしても納得できないところがあれば、時として雑家小説の論じたところでも、その文意に合つてゐるものを取つて解釋を補つた。これもまた平素の讀書による私見の理解である。取ろうとする説は古今か高下かを選ばず、賢か愚か貴か賤かもを問題とせず、ただ文意に當つてゐるものを大切に考へたのである。折衷ということの氣持ちはこのようなものである。

【原文】

其於辭藻一。亦豈有他哉。其於寫二城闕之莊麗衣冠之尊嚴一也。則其所レ依。漢魏乎。盛唐乎。必也鏗然有二雅頌之響一者。然後可三以爲二規矩一也。不レ知者。視以テ古雅矯弊之流一矣。其於二風月之吟花鳥之詠一也。則不三必依二作例典故一。自肆二意所レ趣。盪滌一新。不レ知者。視以テ清新矯弊之流一矣。山水濟勝。則參シ之於謝靈運之游躅一。棲遲隱逸。則考ニ之於陶淵明之眞率一。清高瀟灑。則太白之飄逸。幽憤慷慨。則老杜之沈鬱。人情世態。則白樂天。豪興快樂。則陸放翁。旁及二于鳥獸草木之詠。脂彩香奩之體一。則晚唐宋元諸家之纖巧。亦可二以備考焉。凡其所レ作。古不レ爲レ蔽。今不レ爲レ蔽。遠不レ爲レ蔽。近不レ爲レ蔽。雅不レ爲レ蔽。俗不レ爲レ蔽。其趣其調。因レ物有二移易齟齬一。亦唯其當レ之爲レ尚矣。是之謂二折衷一也。衷也者適レ宜之謂。非レ執二古今之中一也。

【書き下し文】

其の辭藻に於ける、亦豈に他有らんや。其の城闕の莊麗、衣冠の尊嚴を寫すに於けるや、則ち其の依る所、漢魏か、盛唐か、必ずや鏗然として雅頌の響き有る者にして、然る後以て規矩と爲すべし。知らざる者は視て以て古雅矯弊の流と爲す。其の風月の吟、花鳥の詠に於けるや、則ち必ずしも作例典故に依らず、自ら意の趣く所を肆にし、盪滌一新、知らざる者は視て以て清新矯弊の流と爲す。山水濟勝は則ち之を謝靈運の游躅に參し、棲遲隱逸は、則

ち之を陶淵明の眞率に考へ、清高瀟灑せうこうせうしやは、則ち太白の飄逸、幽憤慷慨は、則ち老杜の沈鬱、人情世態は、則ち白樂天、豪興快樂は、則ち陸放翁、旁ら鳥獸草木の詠、脂彩香奩しじふかうれんの體に及べば、則ち晚唐宋元の纖巧も、亦以て考へに備ふべし。凡そ其の作す所、古、蔽を爲さず。今、蔽を爲さず、遠、蔽を爲さず、近、蔽を爲さず、雅、蔽を爲さず、俗、蔽を爲さず。其の趣其の調べ、物に因りて移易齟齬いさご有り。亦唯だ其の之に當れるを尚しと爲す。是れを之れ折衷と謂ふなり。衷なる者は宜しきに適ふの謂にして、古今の中を執るに非ざるなり。

【注】

○盪滌——洗い落とす。洗いすすぐ。『史記』樂書第二に「天子躬於明堂臨觀、而萬民咸蕩滌邪穢、斟酌飽滿、以飾厥性。」(天子躬ら明堂に於て臨み觀て、萬民咸邪穢を蕩滌し、飽滿を斟酌し、以て厥の性を飾ふ。)とある。

○太白之飄逸・老杜之沈鬱——嚴羽の『滄浪詩話』詩評に「子美不能爲太白之飄逸。太白不能爲子美之沉鬱。」(子美太白の飄逸を爲す能はず。太白子美の沉鬱を爲す能はず。)とある。また、『淡窓詩話』にも「太白ガ飄逸、子美ガ沈鬱」とあり、『近世文學論集』(岩波書店、日本古典文學大系)の頭注では「唐詩品彙、總敘」として「李翰林之飄逸」「杜工部之沈鬱」を引く。

○脂彩香奩——唐の詩人韓偓かんあいくに詩集『香奩集』があり、閨女臙脂の様子が詠われている。この詩風を香奩體という。

○古不爲蔽——「蔽」はおおう。昔のことは價值がないとして覆い隠してしまふことはいないこと。

○齟齬——「齟」も「齧」も齒がふぞろいなこと。そこから移り變わりの様子がさまざまでそろつてはいないことについていう。

○衷也者適宜之謂——『左傳』僖公二十四年に「服之不衷、身之災也。」(服の衷なまはざるは、身の災なり。)とあり、

杜預注は「衷、猶適也」であり、陸德明の『經典釋文』もその「衷」について「音忠、適也」とする。補注②參照。

【現代語譯】

（私の折衷は）詩文においても、やはり同じことが言える。宮殿の莊麗さや衣冠の尊嚴さを描寫する場合、そのよりどころとするところは、漢魏であろうか、盛唐であろうか。どちらであつてもそれは必ず金玉が鳴るような雅頌の響きのあるものであり、そうであつて初めて規範となる表現だと言へる。よく分からない人はこれを見て古雅矯弊の流だと考える。風月の吟や花鳥の詠の場合、必ずしも作例典故に依らず、自分で自由に感じたままに表すと、古いものが洗い落とされたような新しさが出てくるが、よく分からない人はこれを見て清新矯弊の流だと考える。山水濟勝の描寫は謝靈運の游躅を參考にし、棲遲隱逸のことは陶淵明の眞率を考え、清高瀟灑については太白の飄逸、幽憤慷慨については杜甫の沈鬱、人情世態のことは白樂天、豪興快樂のことは陸放翁から學べばよいが、その一方で鳥獸草木の詠、脂彩香奩うすねんの體たいに及ぶときは、晚唐宋元諸家の織細巧緻もやはり考えに入れて準備すべきである。すべて自分が作品を作ろうとする場合、昔のことを覆つて捨て去つたりはしない。今のことを覆い隠し捨て去つたりはしない。近くのことを覆い隠し捨て去つたりはしない。遠いことを覆い隠し捨て去つたりはしない。趣や調べは、表現する對象によつてさまざまに變わり、そのあり方はふぞろいである。ただどれにしてもやはり對象を表現するのに最もよいものを考えるのは同じである。このことを折衷と言うのである。「衷」とは宜しきに適うの意味であつて、古今の間の中間を取ることではない。

【原文】

然^{シテ}而猶且^ツ有^レ說焉。夫^レ解^レ經雖^レ折衷^{スト}諸說^ヲ。及^テ其自^{スルニ}得^ニ之^也。皆如^シ出^ル諸已^{ヨリ}。得^テ魚忘^ル筌。何^ニ有^ハ乎諸
 說^ニ矣。蓋^シ道之所^ニ以^テ尊^キ者。在^ニ于行^ニ之^ヲ矣。行^レ之。則古聖賢^ノ所^レ說。皆我^ノ之有^也。雖^レ未^レ之能^ク行^ニ。以^ニ斯
 心^ヲ觀^レ之。則趣操^ヲ觀^ニ焉。摘藻亦如^リ之。其初^ヤ也。雖^レ有^レ所^ニ擬議^{スル}。及^テ其杼^{スルニ}軸^ニ我懷^ニ也。巧拙皆出^ス諸已^{ヨリ}。筆
 端^ノ所^ニ出入^{スル}。雖^レ與^ニ前人^ノ雷同^{スト}。不^レ敢^テ避^ケ。有^レ時乎裁^ニ陳語^ヲ用^レ之。亦皆我^ノ之有^也。是所^レ謂^ル忘^ル筌也。既^ニ而自^ラ
 集^テ其結撰^ヲ觀^レ之。有^ニ磊落者^ニ焉。有^ニ枯單者^ニ焉。有^ニ嚴格者^ニ焉。有^ニ溫柔者^ニ焉。有^ニ閑雅者^ニ焉。有^ニ鄙野
 者^ニ焉。今就^テ其雜集^ニ。抄^ニ錄^ス五百篇^ヲ。以^ニ藏^ニ于篋底^ニ。庶幾^ハ吾子孫讀^レ之從^ニ事折衷^ニ。以^ニ至^ニ于忘筌^ニ矣。

【書き下し文】

然して猶ほ且つ説有り。夫れ經を解する、諸説に折衷すと雖も、其の之を自得するに及びてや、皆諸を己より出づ
 るがごとし。魚を得て筌を忘る、諸説に何か有らん。蓋し道の尊き所以の者は、之を行ふに在り。之を行へば、則
 ち古聖賢の説く所、皆我の有なり。未だ之を能く行はずと雖も、斯の心を以て之を觀れば、則ち趣操観ゆ。摘藻も
 亦如り。其の初めや、擬議する所有りと雖も、其の我が懷に杼軸するに及びてや、巧拙皆諸を己より出だす、筆端
 の出入する所、前人と雷同すと雖も、敢へて避けず。時有りてか陳語を裁して之を用ふ。亦皆我の有、是れ謂ふ所
 の筌を忘るるなり。既にして自ら其の結撰を集めて之を觀れば、磊落なる者有り、枯單なる者有り、嚴格なる者有

り、溫柔なる者有り、閑雅なる者有り、鄙野なる者有り。今其の雜集に就きて、五百篇を抄録して、以て筐底に藏す。庶幾はくは吾が子孫之を讀みて折衷に従事し、以て忘筌に至らんことを。

【注】

○自得——自分で心にさとる（『新字源』（角川・改訂版）・『廣漢和辭典』）。補説③参照。

○得魚忘筌——『莊子』外物篇に「得魚而忘筌」（魚を得て筌を忘る）とある。魚を手に入れてしまつて道具を忘れる。つまり、目的を達成して手段を忘れる意。

○趣操觀焉——『莊子』秋水篇に「知堯桀之自然而相非、則趣操觀焉。」（堯桀の自ら然りとして相非とするを知れば、則ち趣操觀ゆ。）とある。

○抄録五百篇——刊本『南城三餘集』の收録詩數は上卷が六八首、下卷が二九五首で、全體で三六三首を載せている。

【現代語譯】

さてその上でさらに説がある。そもそも經書を解釋するのに、諸説を折衷するとはいつても、自分が理解し納得できた解釋は、すべて自分から出たものようになるのである。魚を手に入れたら魚を取る道具を忘れてしまふという言葉があるが、そのようなもので、理解できてしまえば諸説は無用である。思うに、道が尊い理由はそれを實踐することにある。實踐すれば、古聖賢が述べていることは、すべて自分のものとなる。もしまだ實踐できなくても、實踐することを尊いとする心によってその様子を見ると、その人物の行おうとしている思いは見えてくる。詞章を

作ることと同じようなことが言える。作っている最初では、先人の表現を真似ることがあつても、それが自分の中で作品として練り上げられていくと巧拙はすべて自分から出たもので、表現のところどころで先人と同じくなくなつても無理には避けず、時によつては陳腐と思われる語を使うこともある。そうであつてもそれは皆自分の作品であり、これはあの「筌を忘れる」ということである。やがて自分が文章を作つてその作品を見ると、高大なものがある。面白みがなく弱々しいものがある。おごそかでつつしみ深いものがある。温かでおだやかなものがある。優雅な趣を持つものがある。田舎じみたものがある。今この雑集にあつて、五百篇を抄録し、箱のなかにしまつておいた。願わくは吾が子孫がこれを讀んで折衷に努めて、「忘筌」の境地に至つてもいらいたいものである。

五

【原文】

吾少也、模擬古風。猶行于世。既而漸移于清新。吾亦唯逐時好。久之、覺矯弊之流墮于一偏。從事折衷。有年于茲矣。夫講易老者、必以剛柔與有無爲規矩。及其研覃之久而有得也。剛柔有無兩忘。其又似焉。學書畫者、則義獻之蹟。顧吳之流。必有所依放焉。及其習慣之熟也。得乎心。應乎手。所筆皆我之自出。又何有乎義獻與顧吳矣。亦又似焉。孟子曰。大舜由仁義行。非行仁義也。德行既不拘泥于仁義之規矩如此。凡世間萬事。皆當下以斯心觀之。則無非折衷焉。不獨經義文章爲然也。安政三丙辰十一月朔。六十五翁南城祇自序。

【書き下し文】

吾少きや、古風を模擬すること猶ほ世に行はる。既にして漸く清新に移る。吾も亦唯だ時好を逐ふ。久しくして、矯弊の流一偏に墮するを覺り、折衷に従事すること、茲に年有り。夫れ易老を講ずる者は、必ず剛柔と有無とを以て規矩と爲す。其の研覃けんたんの久しくして得ること有るに及びてや、剛柔有無兩つながら忘る。其れ又似たり。書畫を學ぶ者は、則ち義獻の蹟、顧吳の流、必ず依放する所有り。其の習慣の熟するに及んでや、心に得、手に應じ、筆する所皆我の自出にして、又義獻と顧吳とに何か有らん。亦又似たり。孟子曰く、大舜仁義に由りて行ふ。仁義を行ふに非ざるなりと。德行既に仁義の規矩に拘泥せざること此のごとし。凡そ世間の萬事、皆當に斯の心を以て之を觀るべし。則ち折衷に非ざるは無し。獨り經義文章のみ然りと爲さざるなり。安政三丙辰十一月朔、六十五翁南城祇自序)

【注】

○孟子曰——『孟子』離婁下に「舜明於庶物、察於人倫。由仁義行、非行仁義也。」（舜は庶物を明らかにし、人倫を察す。仁義に由りて行ひ、仁義を行ふに非ざるなり。）とある。

【現代語譯】

私が若かった時、世の中ではまだ古風を眞似ることが行われていた。やがてだんだんと清新を尊ぶようになった。私もやはりそのような時の風潮に従っていた。かなり経ってから弊害を改めるといふやり方はどうしても偏りが生まれることに思い至り、折衷の考え方のもとに、何年かやってきた。そもそも『易經』や『老子』を講ずる者は、

必ず剛柔と有無とを物を考えるとき重要な規範とする。研究を續けて心に悟るものがあれば、剛柔と有無は兩方とも忘れてしまう。(折衷は) そのことと似ている。書や畫を學ぶ者は、王羲之・王獻之の筆跡や、顧愷子・吳道玄の流派を、必ずよりどころにして模倣する。その習慣が十分に極まると、心に感じ、手が自然と動き、筆は自分の思うように動き出し、また王羲之・王獻之、顧愷子・吳道玄は自分には關わりないものとなる。このことともまた(折衷と) 似ている。孟子は「舜は仁義の心をそのまま行つたのである。仁義を手段として行つたのではない」と言っている。德行においても仁義という規範に拘泥しないのはこのようである。すべて世間の萬事は、どれでも皆この心によつて見てみるとよい。つまり折衷でないものはない。折衷はただ經義や文章だけのことではないのである。安政三年十一月朔、六十五翁南城祇自序。

【考異】

本稿で使用した『三餘集』『三餘集自序』と刊本『南城三餘集』『三餘集抄題言』との文字の異同は以下の三箇所である。

- ① 「腐陳」(第一段落) は「題言」では「陳腐」となっている。
- ② 「晚唐宋元諸家之纖巧」(第三段落) は「題言」では「晚唐宋元之纖巧靡麗」となっている。
- ③ 「安政三丙辰十一月朔、六十五翁南城祇自序」は「題言」では「安政三丙辰之年。十一月朔。南城祇手_二錄于南城山窓下_一」となっている。補説④参照。

【補説】

① 「調停家」(第二段落) について

この「調停家」とは廣瀨淡窓のことではないかと思われる。南城の論には廣瀨淡窓の説に基づくと思われるものがいくつもある。『淡窓詩話』(『淡窓全集』中巻(日田郡教育會發行))で、淡窓は「先生論詩詩ノ結末ニ。誰明^二六義要^一。以起^二一時衰^一トアリ。如何ナル處ヲ以テ。今時ノ衰ヲ起シ玉フヤ。」との「問」に對して、次のように言っている。

予ガ詩ヲ論ズルノ詩ハ。二十年前ノ作ナリ。此時壯年ノ客氣未ダ除カズ。一家ノ説ヲ唱ヘテ。當世ノ弊風ヲ矯メントスルノ意アリ。

と述べながら、まさかつての「當世の弊風を矯めんと」した言を訂正し、「明朝以來門戸を分つの惡習」として「世の一家を成す者」が、「己れ一人の好む所を以て、之を天下に施さんとす」ることを指摘し、「是れ我邦に傳染し。其風ますます甚し。」として言う。

當世ノ詩ハ。如何ニモ其體下リテ。風雅ノ旨ヲ失フコト多シ。然レドモ之ヲ矯メントスルトキハ。必ズ一偏ノ説ヲ唱ヘザルコトヲ得ズ。是尤メテ之ニ倣フト云フモノナリ。

と「弊風を矯めんと」することを「一偏の説」になつてしまふと批判している。これは南城の見解と同じである。淡窓は續けて言う。

抑々正徳享保ノ詩ハ。格調アリテ性情ナク。天明以後ノ詩ハ。性情ヲ主トシテ格調アルコトヲ知ラズ。是レ皆一偏ニシテ中ヲ得ザルモノナリ。予ガ好ム所ハ。性情ヲ主トシテ格調ヲ廢セズ。二ツノモノ、中ヲ取ルナリ。

この部分も南城が「調停家」の主張として引いたものとはほぼ同じである。ただ、ここには「折衷の法を得たり」

とは書かれていない。さらに以下のようにある。

子ガ如キ漠然タル説ハ、逆モ人ノ耳ニ入ラズ、是亦子莫ガ中ヲ執リテ、權ナキノ類ナルベシト、自ラ一笑シテ止ミヌ。

ここに「子莫が中を執りて、權なきの類なるべし、自ら一笑して止みぬ」とあり、淡窓は、子莫の論を孟子が「中を執りて、權なし」と批判した言葉を引き己の説について謙遜している。南城はそれを自分の主張に利用して「是れ謂ふ所の中を執りて權無し。偏見と何ぞ擇ばん」と使っている。淡窓の見解は、當時格調説を廢して性靈説が廣く流行する中であつて、冷靜に兩者のよいところをとろうとしたものであり、充分に評價できる内容を持っている。それに對して、南城はその言葉を逆手に取るように使つて、淡窓の見解を「偏見」と批判している。これはやや公正さを缺いた論のように思える。ただ、南城が見たのは『淡窓詩話』の文と違つていた可能性がある。というのは、『淡窓詩話』は明治期の出版であつて、『醒齋語録』の中から韻語に渉る者二卷を抄して上梓したものである。この『淡窓全集』中卷「淡窓詩話小引」。今、『淡窓全集』所收の『醒齋語録』を見ても、この箇所が該当する記述は見えない。疑問が残る箇所である。

② 「折衷」について

南城はこの文章で何回か「折衷」について述べているので、これについて整理しておきたい。まず第二段落は「吾於經說勤折衷四十餘年」と南城は述べている。南城は江戸で片山兼山の弟子である葛山葵岡について學んだ。葵岡の著に『論語一貫』があるが、これは兼山の説を忠實にまとめたものである。その『論語一貫』の序には「博考經傳、以折其衷」（博く經傳を考へ、以て其の衷を折む）との言葉が見える。これが南城の「吾於經說勤折衷四十餘年折衷」における「折衷」の土臺になつてゐると考えられる。

さらに、第二段落の最後に「唯其當之爲尙矣。折衷之志如此。」とある。これについては注で「衷、當也」を示

しておいた。その次は、第三段落の最後に「亦唯其當之爲尚矣。是之謂折衷也。衷也者適宜之謂。非執古今之中也。」とある。この「衷」については、やはり注で杜預注の「衷、猶適也」と陸徳明の『經典釋文』の「音忠、適也」を示しておいた。

「衷」の語義については、これら以外にもたとえば『左傳』昭公六年に「楚辟我衷。」（楚は辟にして我は衷^{ただ}し。）とあり、杜預注は「衷、正也」である。また、「折衷」（折中）の用例としては、『史記』「孔子世家」贊に「中國言六藝者折中於夫子、可謂至聖矣」（中國六藝を言ふ者夫子に折中するは、至聖と謂ふべし。）とあり、「索隱」に「折、斷也、中、當也」とある。つまり、南城の言っている「折衷」とは、經學については廣汎な文獻によつて考證することによつて正しい理解を得ることであり、詩文においては古今の詩風を學んだ上でその時々で主題に應じた適切な表現をすることであつて、結局「折衷」は經學と詩文に共通する學問の方法である。

ところで、南城が『荀子』の句を使つて「唯其當之爲尚矣。」と言ひ、「唯」をそのまま付けて「折衷」を説明しているのはなぜであらうか。當然「唯」の用法として「其當之」を限定し、「其當之」の重要さを強調したい意圖があるのは分かる。だが、そこには南城がやはり「唯」と言わねばならなかつた歴史的背景があつたと考えられる。廣瀬淡窓は「儒林評」において、「當時高名ノ儒者十二七八。折衷學ナリ。其行狀。中頃ノ放蕩ニコリテ。少シク收斂ニ赴ケリ。然レドモ其利ニ走ルコト。極テ甚ダシ。」と述べている。「利ニ走ル」とは、おそらく門弟の月謝でよい収入を得ることや御用學者となつて官職に就くことなどのために學問をするなどであろう。そのような學者が重要視するものは博識であり、彼らの「折衷」は、參酌する各學者の知名度によつて左右されている。すなわち彼らは「古今高下、賢愚貴賤」によつて説の當否を判断したり、また「古今の中を執る」ことで自身の詩風を形成することが「折衷」だつたのだらう。それに對して、南城は江戸にいてそのような儒者の在り方に疑問を持

ち、葛山葵岡から片山兼山の學を學びつつ井上金峨や廣瀨淡窓などの儒者の學説を參考にして自身の「折衷」を形成していつたものと考えられる。

③ 「自得」(第四段落) について

注で述べたように、「自得」とは自分で心にさとることと一應解釋される。『孟子』離婁下に「君子深造之以道、欲其自得之也。自得之則居之安、居之安則資之深、資之深則取之左右逢其原、故君子欲其自得之也。」(君子深く之に造るに道を以てするは、其の之を自得せんことを欲すればなり。之を自得すれば則ち之に居ること安く、之に居ること安ければ則ち之に資すること深く、之に資すること深ければ則ち之を左右に取り其の原に逢ふ、故に君子は其の之を自得せんことを欲するなり。)とあり、『禮記』中庸に「君子無入而不自得焉。」(君子は入るとして自得せざるは無し。)鄭注に「自得謂所郷不失其道。」(自得とは郷ふ所其の道を失はざるを謂ふ。)とある。これらの用例に基づいて『漢語大詞典』では「自得」を「自己有心得體會。」(自分で體得しようとすること)と解説している。

歴史的に「自得」はさまざまな詩人や學者が用いている語である。日本においても、井上金峨は「師辨」(『日本儒林叢書』第八卷)において、「凡學問之道。在乎自得。」(凡そ學問の道は自得にあり。)と述べている。學問は師の説に従うことよりも、自分の力で諸説の取捨をしてゆくことが重要であることを言つたものである。江戸期の儒學では、朱子學・陽明學・古義學・徂徠學などの學問の盛衰があつた。そうした状況の中で儒者たちは自分どの學派に屬するかを強く意識していたのである。金峨は、當時のこうした状況を嘆いて

古之教レ人。各由レ性成レ德。何必欲レ其徒之類レ我乎。今之稱レ師者不レ然。問レ其業。則曰爲レ宋儒氏之所レ爲。曰爲レ陽明氏之所レ爲。曰仁齋氏。曰徂徠氏。雷同勸說。非レ有所レ見。

(古の人を教ふる、各と性に由りて徳を成す。何ぞ必ず其の徒の我に類せんことを欲せんや。今の師と稱する

者は然らず。其の業を問へば、則ち曰く宋儒氏の爲す所を爲すと、曰く陽明氏の爲す所を爲すと。曰く仁齋氏と、曰く徂徠氏と、雷同勸説（そとうせつ）、見る所有るに非ず。）

と述べている。古人は人を教えるときに、それぞれの性質の違いを考えて徳を育てていく。弟子が自分と同じくすることなど考えてはいない。ところが今の師は、宋學や陽明學などの學問を教えることを自分の業としている。そこで、金峨は「凡そ學問の道は自得にあり」と述べたのである。

南城の「自得」にはこの金峨の影響があると思われる。「師辨」ではまた、「學者唯據『訓詁』。考『信六藝』。折中仲尼。以自『得之』已」。(學者唯だ訓詁に據り、六藝に考信し、仲尼に折中し、以て之を自得するのみ。)とも述べている。學問は師の説に従うことよりも、自分の力で諸説の取舍をして經書の理解を進めることが重要であること主張したのである。金峨はまた、「孟子性善。荀子性惡。降至『乎程朱陸王及我伊物』。雖不『必合』於古。要亦各有『得』於己」。(孟子の性善、荀子の性惡、降りて程朱陸王及び我が伊物に至るまで、必ずしも古に合はず。雖も、要は亦各と己に得るに有り。)(『匡正錄』『日本倫理彙編』卷之九)とあり、歴史的に思想家は、假に聖賢の書と合致しなくても「自得」を重要視してきたと言う(衣笠安喜著『近世儒學思想史の研究』法政大學出版局、一五七頁、參照)。これも、南城の「魚を得て筌を忘る、諸説に何か有らん」と「自得」を尊重する點において考え方が似ている。南城は「折衷」を形成するにあたってこうした金峨の説を参考にしたものと考えられる。

④ 「安政三」(第五段落) について

この「安政三丙辰十一月朔、六十五翁南城祇自序」、また『題言』の「安政三丙辰之年。十一月朔。南城祇手二錄于南城山窓下」からすれば、刊本『南城三餘集』(上下)は安政三年の出版と考えられるが、『南城三餘集』には奥付がなく實際の出版年ははっきりとは分からない。そもそも『南城三餘集』は南城の養子、朴齋(美中)が中心

となり、三餘堂の出身者たちの出資によって刊行されたもので、南城の意向が最初にあつて出版されたものではないらしい。『南城三餘集』下に以下のような朴齋の跋文がある。

家翁山居四十年。所_レ賦詩若干卷。手自抄錄_{シテ}在_二篋底_一。幾_レ將_ニ蠹_ニ矣。頃者社友長谷川元輔、邨山洪卿、飯塚永年、山本文毅、山本訓卿、安部公熙、齋藤仲洋相謀。資_二助_一中也。刻_{シテ}以_レ傳_ニ于_二同社_一。中因_ニ與_ニ諸君_一議_{シテ}。標_二釋_一之。使_レ未_レ至_二中地位_一者。知_レ丙典故_所本由_ヲ焉。庶_レ幾_ハ同社後學。有_レ似_ニ續_{スル}折衷之風韻_一者_ニ云爾。美中識

(家翁山居すること四十年、賦する所の詩若干の卷、手自ら抄録して篋底に在り、幾んど將に蠹せんとす。

頃者社友の長谷川元輔、邨山洪卿、飯塚永年、山本文毅、山本訓卿、安部公熙、齋藤仲洋相謀り、中を資助し、之を刻して以て同社に傳ふ。中因りて諸君と議して、之を標釋し、未だ中が地位に至らざる者をして、典故の本由する所を知らしむ。庶幾くは同社の後學、折衷の風韻を似續する者有らんと爾云ふ。美中識す)

ここに「相謀り」とあるが、『三餘集』卷十五に「諸君會議_{スル}刻_ニ拙集_一賦謝」(諸君拙集を刻するを會議す、賦して謝す)の詩がある。卷十五の表紙には「丙辰丁巳至戊午合集」と書かれており、この詩は安政五年ころの作と推定される。つまり、「三餘集自序」が書かれてから二年ほど経過して、『南城三餘集』は刊行されたと考えられる。ただ、福原國郎氏は「編集會議を感謝する詩を書いた南城が、出版の實現を喜ぶ漢詩を書かなかつたとは考えられない。」とし、その詩が『三餘集』に見えないことから南城の死後安政七年以降の出版ではないかと述べている。

(「南城先生の手紙と無名の弟子たち―藍澤南城關係資料斷簡拾遺―」『北方文學』第五十五號)

なお、柏崎市立圖書館藏の關甲子次郎著『柏崎文庫』には、『南城三餘集』に關して「一部 三冊 上木入費 四百餘兩」と記されていて、これによれば出版に際しての費用が「四百餘兩」であつたことが知られる。